

※報道発表資料に関するお問い合わせ先

奈良国立博物館 学芸部 情報サービス室

Tel 0742-22-4463 Fax 0742-22-7221

令和元年 8 月 8 日

奈良国立博物館

御即位記念

第71回

正倉院展

In Commemoration of the Enthronement

The 71st Annual

Exhibition of Shōsō-in Treasures

報道発表資料

〔1〕主 催 奈良国立博物館

協 賛 岩谷産業、NTT西日本、関西電気保安協会、京都美術工芸大学、近畿日本鉄道、
JR東海、JR西日本、シオノギヘルスケア、ダイキン工業、大和ハウス工業、
中西金属工業、丸一鋼管、大和農園

特別協力 読売新聞社

協 力 NHK奈良放送局、奈良テレビ放送、日本香堂、仏教美術協会、ミネルヴァ書房、
読売テレビ

〔2〕会 期 令和元年10月26日（土）～11月14日（木）

全20日、会期中無休

開館時間 午前9時～午後6時

※金曜日、土曜日、日曜日、祝日（10月26日・27日、11月1日・2日・
3日・4日・8日・9日・10日）は午後8時まで

※入館は閉館の30分前まで

〔3〕会 場 奈良国立博物館 東新館・西新館

〔４〕観覧料金

	当日	前売／団体	オータムレイト
一般	1,100円	1,000円	800円
高校・大学生	700円	600円	500円
小・中学生	400円	300円	200円
親子ペア	—	1,100円(前売)	—
セット券	2,500円	2,300円(前売)	—

※団体は責任者が引率する20名以上です。

※混雑緩和のため、11月3日（日・祝）は「団体入場規制日」として、団体専用入場口はご利用いただけません。

※前売券の販売は、7月19日（金）から10月25日（金）までです。

※親子ペア観覧券は、一般1名と小・中学生1名がセットになった割引観覧券です。前売のみの取り扱いとなります。

※セット券は、本展と東京国立博物館で開催される「御即位記念特別展 正倉院の世界」がセットになったチケットです。販売は主要プレイガイド、旅行代理店（一部）、コンビニエンスストア（一部）に限ります（当館観覧券売場では販売していません）。前売セット券の販売は、7月19日（金）から10月13日（日）まで、当日セット券の販売は、10月14日（月・祝）から11月13日（水）午後3時までです。

※オータムレイトチケットは、月曜日～木曜日の午後4時30分以降、金曜日・土曜日・日曜日・祝日の午後6時30分以降に使用できる当日券です。当館当日券売場でのみ、月曜日～木曜日は午後3時30分より、金曜日・土曜日・日曜日・祝日は午後5時30分より販売します。

※観覧券は、当館観覧券売場のほか、当館HP（asoviewチケット）、近鉄主要駅、近畿日本ツーリスト、JR東海ツアーズ、dトラベル、日本旅行、LINEチケット、ローソンチケット［Lコード：58500］、セブンーイレブン、チケットぴあ［Pコード：769-846］、CNプレイガイド、イープラス、PassMe! など主要プレイガイド、一部旅行代理店、コンビニエンスストアで販売します。

※障害者手帳をお持ちの方（介護者1名を含む）は無料です。

※本展の観覧券で、名品展（なら仏像館・青銅器館）も観覧できます。

※奈良国立博物館キャンパスメンバーズ会員の学生の方は、当日券を400円で、職員の方は団体料金でお求めいただけます。

※11月14日（木）は御即位記念のため入館無料（なら仏像館・青銅器館を含む）です。

〔５〕出陳宝物 41件（北倉14件、中倉8件、南倉17件、聖語蔵2件）

うち4件は初出陳

※出陳宝物一覧は別紙

〔６〕展覧内容

本年の正倉院展は、北倉14件、中倉8件、南倉17件、聖語蔵2件の41件の宝物が出陳されます。そのうちの4件は初出陳です。正倉院宝物の全体像がうかがわれる構成となっておりますが、天皇陛下の御即位を記念し、正倉院宝物の成り立ちと伝来に関わる宝物や、宝庫を代表する宝物が顔を揃えることが特筆されます。

聖武天皇・光明皇后ゆかりの品を伝える北倉からは、『国家珍宝帳』の筆頭に掲げられた「御
 袈裟合玖領」のうち七條刺納樹皮色袈裟が出陳されます。聖武天皇の仏教への帰依を象徴する
 ような品で、東大寺大仏への宝物献納に込められた光明皇后の強い思いがうかがわれます。また、
 天武天皇以来、聖武天皇を経て孝謙天皇に至るまで、6代にわたって相承されてきた赤漆文櫛木
 御厨子には、聖武天皇・光明皇后の大切な品が納められていました。今回は本厨子とともに、こ
 こに納められていた遺愛品として、紅牙撥鏤尺・緑牙撥鏤尺が出陳されます。さらに、光明皇
 後の父・藤原不比等（659～720）の真跡が表された屏風を献納した際の目録である天平宝字二
 年十月一日献物帳 藤原公真跡屏風帳も、屏風自体は伝わらないものの、正倉院宝物の成り立
 ちを知る上で極めて重要な品といえます。このほか、聖武天皇らが着用したとされ、後世、天皇
 即位時の礼服・礼冠を調進する際に、しばしば参考に供された冠の一部を伝える礼服御冠 残欠が、
 御即位を記念する今回の展観に出陳されるのも大変意義深く思われます。

一方、本年は、紅牙撥鏤尺、金銀平文琴、金銀花盤といった、中国・唐代の高度な工芸技術を
 伝える宝物や、目にも鮮やかな粉地彩絵八角几など、平城京に花開いた華やかな天平文化を伝え
 る品々が出陳され、展示室を彩ります。また、ペルシアで流行した樹下人物図の系譜に連なる鳥毛
 立女屏風や、アフガニスタンが主産地であるラピスラズリを用いた紺玉帯残欠などの宝物か
 らは、シルクロードを通じてもたらされた異国の文化が感じられます。

このほか、荘厳を極めた仏具の好例として知られる紫檀金鈿柄香炉、紺玉帯残欠を納めるにふ
 さわしい一際華やかな螺鈿箱、聖武天皇の足下を飾った衲御礼履など、宝庫を代表する宝物が豪
 華に揃う様子は、新時代の幕開けを言祝ぐようです。

〔7〕主な出陳宝物（解説は後掲）

1	北倉2	赤漆文櫛木御厨子（ケヤキの厨子）	1基 ※
2	北倉13	紅牙撥鏤尺（染め象牙のものさし）	1枚
3	北倉1	七條刺納樹皮色袈裟（刺縫いの袈裟）	1領 ※
4	北倉161	天平宝字二年十月一日献物帳 藤原公真跡屏風帳（屏風の献納目録）	1巻 ※
5	北倉26	金銀平文琴（金銀飾りの琴）	1張 ※
6	北倉44	鳥毛立女屏風（鳥毛貼りの屏風）	6扇 ※
7	北倉157	礼服御冠 残欠（冠の残片）	一括 ※

8	南倉66	<small>のうのごらいり</small> 衽御礼履（儀式用のくつ）	1両
9	中倉88	<small>こんぎよくのおびざんけつ</small> 紺玉 帯 残欠（玉飾りの革帯）	1条 ※
10	中倉88	<small>ら でんのはこ</small> <small>こんぎよくのおび</small> 螺鈿箱（紺玉 帯 の箱）	1合 ※
11	中倉177	<small>ふん し さいえのはっかく き</small> 粉地彩絵八角几（献物用の台）	1基
12	南倉52	<small>し たんきんでんのえごう ろ え</small> 紫檀金鈿柄香炉（柄付きの香炉）	1柄 ※
13	南倉18	<small>きんぎんのかばん</small> 金銀花盤（花形の脚付き皿）	1基 ※
14	南倉75	<small>ねのひのめとぎのほうき</small> 子目利 箒（儀式用の箒）	1柄
15	中倉18	<small>ぞくしゅうしょうそういん こ もんじよべっしゅう</small> 続 修 正 倉院古文書別 集 第四十八巻 (鏡背文様の下絵・人物戯画ほか)	1巻

※の10件は、5月17日（金）に発表済み。

〔8〕普及事業

■正倉院展講座

正倉院、正倉院宝物に関する公開講座を会期中に開催致します。

詳細は別途公表します。

■正倉院学術シンポジウム2019

正倉院、正倉院宝物に関する学術シンポジウムを会期中に開催致します。

内容、パネラー、スケジュール等の詳細は別途公表致します。

その他の事業、催し等については、決まり次第別途公表致します。

〔9〕問い合わせ

奈良国立博物館 Nara National Museum

〒630-8213 奈良市登大路町50（奈良公園内）

電話 ハローダイヤル 050-5542-8600

FAX 0742-22-7221（学芸部）

ホームページ（URL） <https://www.narahaku.go.jp/>

〈交通案内〉近鉄奈良駅下車徒歩約15分

またはＪＲ奈良・近鉄奈良駅から市内循環バス外回り

「氷室神社・国立博物館」下車すぐ

〔 7 〕 主な出陳宝物

※法量の単位は、寸法＝センチメートル、重量＝グラム

※写真提供＝宮内庁正倉院事務所

1

北倉2

せきしつぶんかんぼくのおんずし
赤漆文櫨木御厨子（ケヤキの厨子） 1基

〔出陳番号 1〕

総高100.0 幅83.7 奥行40.6

前回出陳年＝1998年（東京・2009年）

観音開きの扉が付き、内部が2枚の棚板で3段に画されたケヤキ材製の戸棚。下には床脚しょうきゃくが設けられ、扉には金銅製の鎖子こんどうが備わる。上下と四隅にはケヤキ材製の押縁おしぶちがめぐらされ、頭に銀を被せた鉄釘で留められている。表面は赤色の色料しきりょうの上に透明な漆を塗り重ねる赤漆技法で装飾されている。

『国家珍宝帳』に「御袈裟合玖領」に続いて「厨子壹口（赤漆文櫨木古様作金銅作鉸具）」（〈 〉内は細注）と記されるもので、聖武天皇自筆の雑集ざっしゅう（北倉3）や光明皇后自筆の杜家立成とかりっせい（北倉3）、楽毅論がっきろん（北倉3）などの御書、聖武天皇が光明皇后を迎えた折に相交わした信幣物しんぺいぶつを納めた箱（現存せず）、聖武天皇愛蔵の王羲之おうぎしの書法20巻（現存せず）といった聖武天皇・光明皇后夫妻が特に大切にしていたであろう品々に加え、刀子とうすや帯しやく、笏しやくといった装身具、双六すごろくの駒や賽子さいご、念珠、尺（ものさし）などの小物類、尺八など（北倉4～23）、身近に置かれた比較的小さな品々が数多く納められていたようである。

天武天皇から、持統、文武、元正、聖武、孝謙と歴代の天皇に相伝されてきた非常に重要な品であり、上部が法隆寺金堂こんどうの木造天蓋もくぞうてんがいの吹き返しのように設えられる点や、下半部が新補であるものの、床脚ごりょうやまが御嶺山古墳（大阪府太子町）の棺台の形状と近似することから、『国家珍宝帳』に「古様の作」と記されるように、7世紀後半に遡さかのぼる様式を示すと考えられる。

聖武天皇遺愛の品を多数納めてきたことが確かめられるとともに、天武系の皇統にとって重要視されてきた品として、本品の歴史上に有する意義は非常に大きいといえよう。



2

北倉13

紅牙撥鏤尺（^{こう げ ばちるのしゃく} 染め象牙のものをさし） 1枚

〔出陳番号2〕

長30.3 幅3.0 厚1.0

前回出陳年＝2006年

象牙を染め、表面を浅く彫って文様を白く彫り表す^{もんよう}撥鏤技法で装飾された華麗なものさし。『国家珍宝帳』に赤漆文欄木御厨子（出陳番号1）の納物として記載される「紅牙撥鏤尺二枚」のうちの1枚に当たると推定される。本品は象牙を紅色に染めており、紅白の対比が美しく、また随所に差された緑や黄も^{いろど}彩りを添えている。

表は1寸ごとの界線で10区にわけ、^{からはなもん}唐花文5箇と^{ほうおう}鳳凰、サンジャク、花状の角をもつ鹿（花鹿）、飛鳥、鴨をそれぞれ交互に表している。裏は界線を表さず、サンジャク、ヤツガシラ、蓮華上で^{じゆたい}綬帯を^{くわ}銜える鴨、花鹿、オシドリを草花文と交互に配している。また側面には小花文が表されている。

ものさしと考えられるものの一寸ごとの目盛りが表される程度で実用品とは考えられず、儀礼用に製作されたものと推測される。『大唐六典』には毎年2月2日に^{だいてうりくてん}撥鏤尺と^{ばちるのしゃく}木画紫檀尺が用意されたことが記されており、これらは皇帝が臣下にもものさしを^{たまわ}賜る儀式に用いられたと推測される。豪華に装飾された本品も、こうした年中行事に関連する品と考えて差し支えないであろう。

なお、中倉伝来の^{こう げ ばちるのしゃく}紅牙撥鏤尺（中倉51第1～4号）について近年光学調査が行われ、赤色は^{えん}臙脂、緑色はアタカマイト、黄色は^{しきりょう}有機色料であることが科学的に確認されており、本品も同様の色料が用いられている可能性が高い。



裏

表

3

北倉1

七條刺納樹皮色袈裟（^{しちじょうし のうじゅ ひ しょくのけ さ} 刺縫いの袈裟） 1領

〔出陳番号4〕

縦145 幅262

前回出陳年＝1987年

『国家珍宝帳』の筆頭に掲げられた「御袈裟合玖領」のうち、「七條刺納樹皮色袈裟六領」「一領紺綾裏皂綾縁」とあるものに該当する七条袈裟。袈裟は僧侶が身に纏う衣服で、「濁った色」という意味のサンスクリット語の音写である。赤・青・黄・緑・茶などの平絹を不規則な形に裁ち、刺縫いの技法で継ぎ合わせた長方形の裂を7枚横に継ぎ、裏地を当てて1枚の袈裟に仕立てている。小裂を継ぎ合わせる技法は、糞掃衣とも称される、端裂を集めて縫い合わせ仕立てた袈裟に擬えたものと考えられ、袈裟の本義を踏まえたものと理解される。樹皮色と称されるのは、様々な色の混じった袈裟の見た目が、樹皮を想起させることに依るものと考えられ、今日の遠山袈裟の源流に位置づけられる。なお、縁は新補に替わっている。

聖武天皇は仏道に帰依し、天平感宝元年（749）頃に出家しており、本品のような袈裟を所持し着用した可能性が想起される。袈裟の本義を踏まえながらも、上質の裂を用いた天皇の所用にふさわしい豪華な仕立てとなっており、上代に遡る袈裟の遺例として極めて貴重である。



部分

4

北倉161

天平宝字二年十月一日献物帳 藤原公真跡屏風帳（屏風の献納目録） 1巻

〔出陳番号5〕

本紙縦28.8 全長85.5 軸長31.3

前回出陳年＝1997年

光明皇后による東大寺大仏への献物は4度にわたって行われたが、本品はその掉尾を飾る天平宝字2年（758）10月1日に行われた献納に係る目録。縦の折界を強くつけた厚手の白紙1紙に墨書され、全面に天皇御璽が捺される。紙は近年の調査で亜麻に近い繊維が用いられており、また再生原料を使用したものと判断されている。軸端は撥形で緑瑠璃（ガラス）製。巻末には、藤原仲麻呂（この年に恵美押勝と改名。706～764）と巨勢関（堺）麻呂（？～761）の位署書があ

る。書は中国・唐、咸亨3年（672）立碑の集王聖教序や褚遂良（596～658）の書風に通じるところがあるとされ、当代の名筆に挙げられる。

光明皇后が亡父・藤原不比等（659～720）の眞跡という、屏風12扇を東大寺に献納したという内容で、「妾の珍財、これに過ぐるはなし」（私にとってこれに勝る貴重なものはない）、「早く花蔵の界に遊び、恒に芳閣の尊に対せんことを」（早く蓮華花蔵世界に達し、恒に盧舎那仏の教えを受けられるように）との願文からは、皇后の父に対する強い思慕と、菩提を祈る孝行の念がうかがわれる。

なお、屏風は後年出蔵されたとみられ、現存していない。



5

北倉26

金銀平文琴（金銀飾りの琴） 1張

〔出陳番号6〕

全長114.5 額の幅16.0 尾の幅13.0

前回出陳年＝1999年

琴は古代中国で成立した絃楽器。7絃で琴柱を用いず、左手で絃を押さえ、右手で弾いた。我が国には上代にもたらされたとみられ、法隆寺献納宝物中に中国・唐の開元12年（724）銘の七絃琴（国宝。東京国立博物館蔵）が伝わっている。

本体はキリ材製、臨岳（絃を受け、裏面に通す7孔のある突出部）及び龍尾（奏者からみて左端の部分）はシタン材製。本体の表面に黒漆を塗り、文様の形に切った金銀の薄板を表面に貼り付け、漆で塗り込めた後に文様部分を研ぎ出して現す平文の技法で全体に装飾が施されている。

表は中央に金平文で波文を表し、両側に銀平文で鳥や虫、草花を配し、金平文の遊楽人物を並べている。奏者からみて奥には、13箇の徽（絃の押さえどころ）を金平文で表している。上手には花菱文で方形に区切った中に、金平文で、樹下で阮咸を弾く高士、琴を弾く高士、角杯で酒を飲む高士を三角に配し、山岳や岩、飛仙、孔雀などの鳥や草花を表している（部分図参照）。方形の下手には、金銀平文で樹下に琴を弾く高士と飲酒する高士を対置させている。臨岳の上下には銀平文で山岳、飛仙、鳥、雲などを表している。裏面は全て銀平文で、軫池（絃留めを収めるための横長の窪み）の上下に山岳、鳥、雲を配し、方形の区画内に4行の琴の音色を讀える四言八句の詩文（後漢・李尤作『芸文類聚』巻第44・楽部・琴所収）を記す。下手は、龍池（中央の響孔）の上下に草花、左右に龍を置き、鳳沼（尾部側の響孔）の上下にも草花、左右に鳳凰を配している。この他に磯（長側面）にも獅子、鹿、鳳凰、花鳥が表され、側面頭部には鳳凰、尾部には麒麟を主とする文様が表されている。概ね全面にわたって、毛彫を施した金銀平文で瑞獣や瑞鳥、遊楽に興じる高士を配しており、非常に装飾性豊かである。

なお、本品は、弘仁5年（814）に出蔵された『国家珍宝帳』記載の「銀平文琴」に替わって、弘仁8年（817）に代納された品で、鳳沼部分内部の墨書より、唐の開元23年（735）に製作されたと推定されている。他の北倉の宝物とは由来を異にするものの、盛唐期の高度な工芸技術を伝える第一級の文物としてよく知られている。



表



裏



表・部分

6

北倉44

とり けりつじよのびよう ぶ
鳥毛立女屏風（鳥毛貼りの屏風） 6扇

〔出陳番号7〕

〔第1扇〕縦135.9 横56.2 〔第2扇〕縦136.2 横56.2

〔第3扇〕縦135.8 横56.0 〔第4扇〕縦136.2 横56.2

〔第5扇〕縦136.2 横56.5 〔第6扇〕縦136.1 横56.4

前回出陳年 第1・3扇＝1999年（東京・2014年）

第2・4・5・6扇＝2014年

こっ か ちんぼうちよう
『国家珍宝帳』に記載される「御屏風壹佰畳」のうち

「鳥毛立女屏風六」に当たるもの。現在も全6扇が残る。



第2扇



第1扇

各扇とも樹下に豊かに髪を結い上げたふくよかな女性を一人配する構図で、第1扇から第3扇は立ち姿、第4扇から第6扇は岩に腰掛ける姿で表される。楮紙を貼り継いだ画面に白色の下地を施して、念紙を使用して図様を写し、墨線で描き起こしていると考えられる。顔や手、着衣の袖口などに彩色が施され、着衣や樹木などには日本産のヤマドリ^{さしみき}の羽毛が貼り付けられていたことが微細な残片からわかる。なお、第5扇の屏風下貼には天平勝宝4年（752）6月26日付の「買新羅物解」（新羅使が舶載した物品を買い求めるため、貴族が購入を希望する品目とその対価を目録にして朝廷に提出した文書）の反故紙が用いられている。また近年の調査で本紙にも反故紙の裏が使用されていることが確認されており、屏風の製作環境と製作年代を知る上で興味深い。

盛唐の風俗を反映した豊満な「天平美人」として名高い本屏風が揃って出陳されるのは、平成11年（1999）以来20年ぶりである。



第6扇



第5扇



第4扇



第3扇

7

北倉157

らいふくおんかんむりざんけつ
礼服御冠 残欠（冠の残片） 一括

〔出陳番号11〕

葛形裁文 横13.5 鳳凰形裁文（写真左下） 縦9.7

前回出陳年＝2002年

複数の冠の残欠が一括整理されているもので、主要な残片は天平勝宝4年（752）の大仏開眼会で聖武天皇、光明皇后が着用された冠や孝謙天皇ご所用の冠に関わるものとみられている。すなわち、正倉院宝庫には聖武天皇、光明皇后、孝謙天皇の「御冠」4頭が収蔵されていたことが記録から知られ、そのうち聖武天皇、光明皇后の冠については、本品に附属する木牌の記載により、大仏開眼会で礼服とともに着用されたものと推定される。これらの冠は、天皇即位の礼冠の手本にするため、たびたび宝庫から出蔵が図られた。仁治3年（1242）の後嵯峨天皇の即位に際しても、諸臣の礼冠26頭とともに出蔵された事実が知られるが、この出蔵の折、不慮の事故で大破したという。現状、複数の冠の残欠が入り混じる状態で伝来したのはこのときの事故に起因すると考えられる。

本品は、日光形や鳳凰・植物などを象った金具、真珠や瑠璃、珊瑚を連ねた雑玉類、漆沙など多様な素材からなる。国内産の真珠を使用する一方、珊瑚は地中海及びその近海に産するベニサンゴに近いことが判明しており、国際色豊かな素材の使用が注目される。

各々がどの冠のどの部位を構成したものか、特定は容易ではないが、記録に見える冠に関する記述や、附属の冠架（出陳番号13・15）の構造を踏まえることで、往時の姿をおぼろげながらも想像することができる。

なお、現在のところ、明確に礼服の一部とみられる部材は確認されない。



8

南倉66

のうのごらいり
納御礼履（儀式用のくつ） 1両

〔出陳番号16-1〕

長31.5 爪先幅14.5 高12.5

前回出陳年＝2014年



爪先が反り上がった浅い靴。先端は二つに分かれている。左右は同形。白い厚革を芯材とし、表面には赤く染めた牛革を用いており、側面部分ではスウェード状の起毛が観察される。内面には鹿革の白革が用いられている。爪先の扇形部分や側面と底との継ぎ目など革の断面が見える部分には白色（鉛白）を塗り、縫い目部分は金線をあしらって化粧を施している。また、表面には各13箇の花形の飾りが取り付けられている。これらは銀製鍍金（とぎん）の花形金具の花心部分と花弁の先には真珠を、その他の部分には色ガラスや水晶（は）を嵌めた豪華なものである。内側には蘭薙の芯を麻布で包み、それを小唐花文（しょうからなもん）の白綾（あや）と葡萄唐草文（ぶどうからくさもん）の白綾で包んだ底敷きが入られている。

本品は天平勝宝4年（752）4月9日に行われた大仏開眼会にて、聖武天皇（当時は太上天皇）が履いたものと推測されている。聖武天皇は、太上天皇の装束（しょうぞく）である帛御袍（はくのごほう）を着用し、冕冠（べんかん）を被って参列したと推測されており、礼服御冠（らいふくおんかん）（出陳番号11）にその一部が含まれているとみられる。

なお、本品には内底に履形を削り込んだ赤漆履箱（くつがた）（出陳番号16-2）が附属しており、聖武天皇の冠を納めたという赤漆八角小櫃（せきしつはっかくのしょうき）（出陳番号12）、光明皇后の冠を納めたという赤漆六角小櫃（せきしつろっかくのしょうき）（出陳番号14）と、仕様が近似する点も注目される。

9

中倉88

こんぎよくのおびざんけつ
紺玉帯（玉飾りの革帯） 1条

〔出陳番号18〕

現存長156 幅3.3 巡方縦3.1 横3.6

丸鞆縦2.3 横3.3

前回出陳年＝1999年（東京・2009年）



こんぎよく
紺玉 すなわちラピスラズリで飾られた革帯（かわおび）。5片に分かれていたものを昭和49年（1974）に修理・接

合したが、欠損箇所があるため現状で2片に分離している。帯の部分は革製で、薄い革を袋状にして、縫い目を内側に向けて成形しており、^{かこ}鉸具を留めるための4つの孔を開けている。表面には黒漆塗を施している。先端の鉸具は銀製鍍金、3箇の方形の巡方、7箇の半円形の丸柄、尾端の鉸尾は紺青に白い斑の入ったラピスラズリ製で、それぞれ革帯の裏面に銀製の座を取り付け、銀製の鉸で表から留められている。ラピスラズリはアフガニスタンのバダフシャン産のものが有名で、革は近年の調査で小型動物の皮と推定された。

奈良時代の衣服に関する規定には玉帯^{ぎよくたい}についての記述はないが、中国・唐では最高位の官人のみ金玉帯^{きんぎよくたい}が許されており、我が国でも皇族あるいは高位の貴族の所用品かと思われる。金具も銀製であることから、最高級の品であることは間違いなく、あるいは刀子等とともに東大寺の仏・菩薩に献納されたものかとも想像される。

10

中倉88

螺鈿箱（紺玉帯の箱） 1合

〔出陳番号19〕

径25.8 高8.4

前回出陳年＝1999年（東京・2009年）

紺玉帯^{こんぎよくのおび}残欠を納めた円形の箱。木製、印籠蓋造^{いんろうふたづくり}で、内側には覗^{うちばり}を入れる。ヒノキ材を轆轤^{ろくろ}で挽いて成形しており、角は撫角様の柔らかい仕上がりになっている。表面は布被をした後に黒漆^{くろうし}を塗布し、螺鈿や小四弁花文などの伏彩色^{ふせざいしき}を施した水晶を用いて、唐花文様や雲、鳥を表している。蓋表の中央の花弁には、文様の形に切り抜いた金板を漆で塗り込めた後に、文様部分の漆塗膜を剥ぎ取って文様を表す平脱^{へいだつ}の技法が用いられている。覗^はは麻紙を芯とし、表には暈縹地に小花葉文を表した経錦^{まし}を、裏に浅緑地目交縹縹文の絶^{あしぎぬ}をあしらったもので、表裂は色彩豊かで非常に煌びやかである。



身

現存する宝物中に、漆地に螺鈿を施す作例は、本品の他には螺鈿槽笠篋^{らでんそうのくご}（南倉73）が知られる

のみで、また平脱と螺鈿を併用する例は本品が唯一であり、奈良時代の漆工史上に重要な位置を占めている。

漆黒に白いヤコウガイの螺鈿が輝く対照性の強い装いに、赤や青の彩色を底部に施した水晶が彩りを添えており、華やかな天平文化を彷彿させるに充分な、豪奢な作りである。

11

中倉177

ふん じ さいえのはっかく き
粉地彩絵八角几（献物用の台） 1基

〔出陳番号21〕

径41.0 高9.3

前回出陳年＝1995年（東京・2009年）

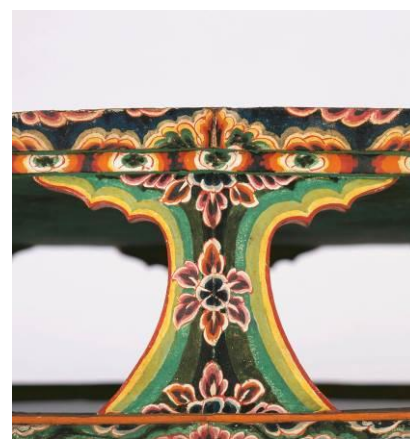
てんばん しょうきやく たたみずり けんもつ き
天板に床脚と畳摺がついたヒノキ材製の献物几。献物几とは、仏前への献物に際し、供物を載せる台のことを

いう。宝庫にはこうした献物几が多数伝わり、東大寺の法要や天皇・廷臣からの献物に用いられたとみられる。中でも表面に鮮やかな花文が彩色された本品は最も華麗な遺例として知られる。

天板は八稜形（八方の先端が花卉状に尖った形）で、柁目材の一枚板から作られる。側面の下端には1段の欠込を設け、上下2段に区分けしている。床脚は、それぞれ柁目材を横木取りして作った脚を天板裏の各稜の部分に接合しており、隣り合う脚の輪郭の曲線が花先形の格狭間を形作る。畳摺は横木8材を繋ぎ合わせて八稜形に作り、側面の上端に1段の欠込を設けて、天板の形と対称させている。

彩色は表面全体に施され、天板の上面を緑、裏面を萌黄に塗るほか、華やかな花文を赤・青・緑・紫系の暈縹彩色（同系統の色を濃色から淡色に段階的に配列する彩色法）で表し、文様の輪郭を朱線で括る。顔料に関する調査では、赤は水銀朱、青は岩群青、緑は岩緑青、橙は鉛丹を使用していることが判明しており、その他にも藤黄や臙脂といった有機質のもの使用も推定されている。

奈良時代の彩色文様が非常に良好な状態で残る稀有の事例として注目される品である。



脚部分

12

南倉52

紫檀金鈿柄香炉（柄付きの香炉） 1柄

〔出陳番号22〕

長39.5 高7.6 炉径11.0

前回出陳年＝2007年

柄香炉は、香を焼べる炉に持ち手の柄を取り付けた香炉で、仏前や行道で僧が手に執り供香するのに用いる。香炉は金属製が多いが、本品は主要部分をシタン製とする珍しい遺例。炉は口縁が大きく開く朝顔形で、花形の台座を伴い、内部には獅子形の鈕（つまみ）を備えた金銅製の内炉を入れる。柄はL字に屈折した末端に獅子形の鎮子（おもし）を付けたもので、炉側の先端に作り出した柄を炉体に貫通させ、さらに弓形の肘木（現状のものは新補）で繋ぎ、炉と接合する。炉体や台座、柄には、金象嵌によって花卉、蝶、飛鳥などを表し、花心には赤の伏彩色を施した水晶や青・緑色のガラスを嵌める。また、柄の上面の樋状の溝には赤地唐花文錦を敷き、柄元には飛鳥唐草文を透彫した銀製鍍金の心葉形の金具を付ける。金具の上面には藍色ガラス製の中房をもつ銀製蓮華と水晶珠を据える。その贅を尽くした煌びやかな装飾は、現存する柄香炉の中でも随一である。『続修正倉院古文書後集』第41巻(中倉17)に、光仁天皇崩御(天応元年[781])に際して「紫檀御香爐一具」が東大寺に施入されたことが見え、これが本品に当たる可能性が指摘されている。



炉側面

13

南倉18

金銀花盤（花形の脚付き皿） 1基

〔出陳番号29〕

径61.5 高13.2 重4496.2

前回出陳年＝2009年

六花形をなす銀製の皿で、宝庫に伝来した盤の中では最も大きく華麗な遺例である。中心の表裏にコンパスの軸点が残っており、コンパスで引いた円に沿って銀板を切り抜き、鋳で叩いて皿状に成形した

とみられる。中央に花状の角をもつ鹿、外周に3つの花で構成する花文を表し、文様部分にのみ鍍金を施す。文様周辺に残る点列は、文様の下図を盤面に写し取る際のあたりとみられ、これに沿って輪郭を蹴彫（線刻技法の一つ）し、裏側から打ち出して文様を浮き立たせている。周縁には諸色のガラス玉などを連ねた垂飾（大部分は新補）がめぐる。花状の角をもつ鹿は中国・唐代の工芸品にしばしば登場するモチーフで、正倉院宝物でも紅牙撥鏤尺（出陳番号2）などに見ることができる。また、花文の形状も唐代の金銀器の文様に通じる特徴を示している。裏面には「宇字号二尺盤一面重一百五兩四錢半」、「東大寺花盤重大六斤八兩」という2つの刻銘があり、前者については中国固有の重量の単位である「錢」が見られ、また盤面の文様と同じ蹴彫で刻まれることなどから、本品が中国製であることの根拠になっている。その大きさと豪華な装飾から、遣唐使が唐から公式に賜った品である可能性も指摘されている。



盤面



部分

14

南倉75

ねのひのめとまのほうき

子日目利 箒（儀式用の箒） 1柄

〔出陳番号31〕

長65.0 把径3.9

前回出陳年＝2009年

中国古来の宮中儀礼に、皇后自らが^{ほうき}箒で^{さんしつ}蚕室を掃き清めて^{さんしん}蚕神を祀り、
その年の^{ようさん}養蚕の成功を祈願するというものがある。わが国でも奈良時代の
^{こうけんてんのう}孝謙天皇の代に、こうした中国由来の儀式が宮中の年中行事に導入され
た。

『^{まんようしゅう}万葉集』巻二十には、天平宝字2年（758）正月3日（^{はつね}初子の日）
に王臣等を^{だいり}内裏に召して催された儀式のことが見える。そこでは、出席者
に「^{たまほうき}玉箒」が^{かし}下賜され、^{しょうちよく}詔勅によって歌を^よ詠むことが課されたという。同書には、この折の
^{おおとものやかもち}大伴家持（718?～785）の一首「^{はつはる}始春の^{はつね}初子の今日の^{たまはばき}玉箒 手に執るからにゆらく玉の緒」が
採録されている。この「玉箒」に該当し、蚕神を祀る儀式に用いたと考えられる箒が宝庫に2柄
伝わっており、本品はそのうちの1柄である。

「子日目利箒」の名称は、初子の日に使用されたこと、素材がメドハギというマメ科の植物と
みなされたことに由来する。ただし、実際はキク科のコウヤボウキを使用していることが調査で
判明しており、この茎を^{たば}束ねて^{とって}把手の部分^を紫色の鹿革で包み、さらに金糸で巻いて作っている。
枝にはところどころにガラス玉が挿し通されていたが、本品では現状、濃緑色の玉6箇を残すの
みとなっている。

なお、蚕神を祀る儀式は中国では3月に行われており、正月に使用された子日目利箒とこの儀
式との関係を疑問視する見解がある。用途についてはなお検討の余地があるが、奈良時代の宮中
儀礼に関わる貴重な遺例として注目される。



15

中倉18

続 修 正 倉院古文書別集 第四十八巻（鏡 背文様の下絵・人物戯画ほか） 1巻

〔出陳番号36〕

前回出陳年＝1999年

様々な絵や文書等を貼り継いで1巻に仕立てたもの。第1・2紙は鏡の背面の下絵で、紙背は天平宝字6年（762）4月20日から5月2日に至る造石山院所の帳簿である。正倉院文書中の石山寺造営に関する文書より、同年3月24日に孝謙太上天皇の命で直径1尺の鏡4面が作られることになり、その下絵が提出されていることがわかるので、本品がこの時の下絵に当たる可能性が想起される。第1紙には天平尺の丁度1尺の円が描かれ、中心に葉形を組み合わせた鈕の断面が表され、これをめぐって四神のうちの青龍、朱雀、玄武の三神が瑞雲とともに描かれる。第2紙には別種の鈕と八花鏡の外郭が表されている。

第3紙は、天平17年（745）4月1日で始まる帳簿が2行で終わり、余白に、目を大きく見開いて口を開き、上半身に力を漲らせて肩を怒らせたひげ面の官人の姿を描いたもの。脇には「大大論」と記されており、熱を帯びた議論の様を手遊びに描いた戯画であるとも言われる。筆者として写経所の官人であった志斐麻呂を充てる見解がある。なお、料紙には界線が引かれており、写経（一説に光明皇后発願の五月一日経とも）の料紙の断片が使用されていると考えられる。

本巻にはこのほか、写経所の職員の習字や草書の文字を楷書と対照したもの、万葉仮名で書かれた書状、僧・正美による朱筆の書状など、興味深い文書が継がれている。



鏡背下絵



大大論戯画